

ウルトラマンマックス

勇気を胸に

第3稿

脚本／小中千昭

TelePlay by Chiaki J. Konaka

2005\09\29

登場人物

トウマ・カイト

コイシカワ・ミズキ

コバ・ケンジロウ

シヨーン・ホワイト

エリー

ヒジカタ・シゲル

ヨシナガ教授

集中治療室の医師

UDF隊員達

グランゴン（一話の別個体／死骸）

ラゴラス・エヴォ（ラゴラスの進化体）

○ベース・タイタン／夜

N 「束の間の平和な夜だった」

○カイトの私室

落とされた照明。素っ気ない私室——。
ベッドのカイト、夢を見ている——。

N 「カイトは夢を見ていた——」

○カイトの夢／第一話リプライズ

龍巖岳で争うラゴラスとグランゴン。
ミズキのバード1、不時着。
カイト、ミズキをコクピットから救出。

カイト「君の代わりに俺が飛ぶ！」
ミズキ「えっ？」

飛び立つバード1。
ラゴラスの冷凍光線に被弾し、落下するバード1。
カイト「うああああっ！」
と！背後から迫る赤い球体。
静止する時間——。

○カイトの私室

カイト、苦しげに煩悶する顔——。

○カイトの夢／オルタナティブな未来

バード1に迫る球体——、すっと消える。

暗転

○カイトの夢／抽象的な集中治療室

ぼうっと立っているカイト。どうして自分がここに
いるのか判らないでいる。

カイト「？」

寝台に寝かされている者がいる。全身を包帯で巻か
れ、生命維持装置でやっと生き存えている。

寝台の向こう、シルエットで立つ人々――。

ヒジカタ「――勇気と無茶は違う――。その事を、この青年に教
えるべきだった……」

医師「出来る限りの処置はしましたが……」

哀しむミズキを、ション、コバが慰めている。

カイト「(混乱)」

カイト、ベッドに近づき――、その瀕死状態である
者が誰かを知る。

カイト「!!」

それはカイト自身だった。虚ろな目を見開き、生き
続ける限り続く恐怖に絶望した顔――。

カイト「うあああああっっっっ!」

○カイトの部屋

叫び声を上げ飛び起きるカイト。

カイト「……(今の夢は……)」

汗に濡れ、考えているカイト――。

と! 鳴り出す警報音。

カイト「!?!」

○司令室

制服を着ながら走り入るカイト。既に他の隊員、ヨ
シナガ教授も揃っていた。

カイト「どうしたんですか!?!」

ヒジカタ「龍巖岳で、怪獣の死骸が発見された。エリー」

エリー「モニタに映します」

カイト「死骸……?」

夜の山中、地元機関により照らされているのはグランゴンの死骸。

カイト「……あれは——」

ヨシナガ「グランゴン。前に出てきた怪獣の別個体でしょう」

ミズキ「——(カイトを一瞥)」

コバ「しかし何故死んでるんだ……?」

映像はグランゴンの虚ろになった背部に寄る。

ショーン「あれ? 見て! 背中にあった、マグマ状のコアが無くなっていく」

ヨシナガ「エリー、もっと大きくして」

エリー「はい」

ピッ。死骸の背中に、歯形が残っていた。

ヒジカタ「——他の怪獣に喰われた……」

ミズキ「隊長、あの怪獣はかつて、もう一匹の怪獣と呼び合う様に現れました」

ピッ。ラゴラスの静止画像。

ヒジカタ「(頷き)ラゴラスの別個体もいるという事か」

ヨシナガ「しかもそれは——、グランゴンを食べてしまった。以前のより強化しているかもしれない」

カイト「……」

○龍巖岳／前線基地／翌日午後

バード2機とマザーが翼を並べ、その近くに仮設テント、トレイラーの前線基地が設営されている。

N 「DASHとUDFは、龍巖岳に前線基地を設営し、次なる怪獣の出現に備えた」

○同／グランゴン死骸前

変色し始めているグランゴンの死骸。

ショーンは、僅かに残ったマグマ・コアを採集。

ヒジカタ「(パッドに) 昨晚よりも急速に腐敗が進んでいます」

パッド内ヨシナガ「――怪獣の化石というものが殆ど発見されてこなかったのは、腐敗が早く進むからかもしれないわね」
降りてくるショーン。金属ケースに、マグマ・コアのサンプルが入っている。
ショーン「このサンプルを解析すれば、怪獣の撃退方法が判るか
もしれません」

コバ「かもじゃ駄目だろ。絶対発見しろよ、ショーン」
ショーン「(苦笑) Okay. 」

ショーン、トレイラーに向かっていく。
と、DASHアルファが走ってきて、カイトとミズキ、降りて隊長のところへ。

カイト「近隣の住民の避難、確認しました」

ミズキ「病院の患者も移送済みです」

ヒジカタ「(頷き) 先手は打ったが――」

ピッ。ヒジカタのパッドに着信。

パッド内エリー「隊長、龍巖岳に磁気異常を検知。微弱な振動が高まっています」

カイト「！ 来る……」

ヒジカタ「DASH、迎撃！」

隊員「了解！」

ミズキ、コバはそれぞれDASHバード1、2へ。
カイトはアルファに走る。

○アルファ車内

着席したカイト、パネルを操作。

アルファ、ストライクヴァイパー発射用意。

▼フラッシュ/ICUで包帯にくるまれるカイト。

カイト「――(モノ) ここである時、マックスに出会わなかったら俺は……」

と！ 激しい地鳴りと振動。

カイト「！」

○龍巖岳

ドドオオオンンンニニ 突如山肌が崩れ、悪魔がそのおぞましい顔を見せ――

○OP

○龍巖岳

姿を現した怪獣、ラゴラスではあるが、その腹部にはマグマ・コアが露出し、全身の色も赤黒く変色。そして、その顔――。最早それは進化したラゴラス・エヴォ。

○UDFトレイラー前

トレイラー後部から飛び出してくるショーン。
と！ ラゴラス・エヴォ、顔を横に向け、見上げているショーンを睥睨する。

ショーン「――」

ゲゲゲゲゲゲ――。それは哄笑している声なのか。
ショーン「(frightened) It's terror...」

黒目の無い眼は煌々と輝き、口蓋はおぞましく裂けている。それは見る者を恐怖させる、まさに悪魔の姿だ。

と！ 頭上を飛ぶDASHマザー。

ヒジカタ「(無線／オフ)フォーメーション・β5！ 冷凍光線に気をつける！」

○龍巖岳

DASHマザー、バード1、2、アルファによる集中攻撃。ミサイル弾幕がラゴラス・エヴォに向かっ
ていく。

とニ ラゴラス・エヴォの身体、マグマ・コアを中

心にハレーションの様に光り――

○各機コクピット

コバ「ニ ミサイルが！」

○龍巖岳

ラゴラス・エヴォに向かっていたミサイル、身体に
触れる直前で自壊――、閃光と共に爆発！

○ミズキ機コクピット

ミズキ「ミサイルが効かない！」

嘲笑うかの様に声を上げ、軀を揺らせているラゴラ
ス・エヴォ。ミズキ機に超温差光線を吐く。

ミズキ「くっ」

咄嗟に操縦桿を引く。

○龍巖岳

ゴオオオオオオツツニ 超温差光線を必死にかわ
し転回しているミズキ機。

コバ「(オフ/無線)ミズキニ 早く振り切れニ その光線は
近づいただけでやられちゃう！」

○ミズキ機コクピット

超温差光線の影響で激しい振動の機内。

ミズキ「(必死)クウウウウツツ！」

○龍巖岳

やっと超温差光線が途切れ、ミズキ機、逃げきる。

○DASHアルファ車内

カイト「(安堵) ミズキ……」

カイト、眼を怪獣に向けたまま、マックス・スパークを無意識に取り出した。

カイト「(モノ) ——俺は、マックスの力に頼ってばかりだ……」

カイト、スパークを置き、パネル操作。

ブラストバスターをラゴラス・エヴォに放ちながら急発進。

○龍巖岳

ラゴラス・エヴォ、アルファに振り向き、アルファを追い始める。

カイト「(無線/オフ) 隊長！ アルファで怪獣の気を引きます」

○各機コクピット

ヒジカタ「気をつけるカイト！ コバ！ プラズマショットを撃て！」

コバ「了解！ ——(呟き) どこを狙う……。そこだ！」

○龍巖岳

バード2、機体前部ブレイド間にプラズマを発生。それをラゴラス・エヴォに向け放つ！
ラゴラス・エヴォ腹部のマグマ・コアに激突するプラズマ。マグマ・コアの輝きが少し鈍くなった。

○各機コクピット

コバ「やったか！」

ミズキ「！ 怪獣が地底に潜り始めた！」

○龍巖岳

素早く地底に潜ってしまうラゴラス・エヴォ。

○アルファ車外

走り出てくるカイト——。

カイト「——しまった……。逃してしまった……」

後悔しているカイト。

○龍巖岳前線基地／夜

N 「進化した怪獣、ラゴラス・エヴォは地底で不気味に沈黙していた」

テント内でミーティングをしている、ショーン以外のDASH隊員。

○テント内

液晶パネルに浮かぶラゴラス・エヴォの画像。

コバ「一体こいつの体ん中はどうなってんだ」

ヒジカタ「ヨシナガ教授によると、この怪獣は単に強くなっただ

けではなく、知能も進化しているらしい」

ミズキ「この顔——、あの声——。人間を嘲笑ってるみたい……」

カイト「——（自分の判断の甘さを悔いている）」

コバ「ショーン、こいつを撃破出来る方法を見つけられるかな」

ヒジカタ「（トレイラーの方を見て）うむ……」

カイト「——自分が見てきます」

カイト、出ていく。見送るミズキ。

○トレイラー内

小さな実験光線発射装置に光が満ちていく。

アイシールド越しに見つめ、操作コンソールのキーボードに数値を入力するショーン。

と！ その瞬間に自壊してしまう発射装置。煙が立ち込める。

ドアが開き入ってくるカイト——。

カイト「大丈夫かショーン!？」

ショーン「(咳き込み) I'm Okay, but...」

壊れてしまっている実験光線発射装置。

ショーン「怪獣のマグマ・コアを自滅させるAGメーザー、Anti G

eo-Monster MASER、そのシステムは出来たけど、その

周波数に合わせると、発射前に壊れてしまうんだ……」

カイト「！ プランは出来てるんだろ？ 凄いじゃないか。あと少しだよ」

ショーン「……」

力なく椅子に座るショーン。

ショーン「バードから発射した途端に、バード自体が壊れるよ。

次に怪獣が現れるまでに、解決方法が思い浮かべば……」

カイト「思いつくさ。きっと出来る」

ショーン「出来なくても、きっとマックスは助けしてくれる……」

カイト「！」

ショーン「——僕は、今日初めて怪獣を怖いと思った……。怪獣

は単に巨大な生物じゃない。あいつは明らかに僕たちを

憎んでいたし、弱い生き物だと嘲っていた……」

カイト「——ショーン……」

○トレイラー前

気になってやってくるミズキ——、が、中を覗くと誰もいない。

ミズキ「？ (見回す)」

トレイラーからやや離れたところを、並んで歩いているカイトとショーンの後ろ姿が見えた。

○前線基地近く

並んで座るカイトとショーン。

ショーン「僕は、自分の発明したもので怪獣を倒すのを楽しんでいただけ、なのかな……」

カイト「——俺もさ、最近マックスに頼っちゃってるなあって、自分でも思ってたんだ」

ショーン「——」

ミズキ、やや離れたところに来て来るが、声をかけられずにいる。

カイト「——俺、中学くらいから旅行が好きでさ——」

ショーン「……?」

カイト「よく一人で色んな所へ旅してた。よりによって、俺が旅に出てる時に——、家が地震災害に遭って——、俺の親は……」

ショーン「……」

聞いていたミズキもややショックを受けている。

カイト「俺は親を救う事すら出来なかった。けど、これが運命だなんて俺は考えたくないんだ——。俺は何の才能も無いし、だからDASHの入隊テストにも落ちたし——、もう、俺の親は救えないけど——、これから救える人はいる、そう思ったんだ……」

ショーン「カイト……」

カイト「ショーンには才能があるじゃないか。ショーンの才能で、多くの人の命が救えたじゃないか」

ショーン「——（何度も頷き）Yeah.. Thank you, カイト」

カイト「（微笑）——俺たちが頑張らなきゃ、マックスだって助けてくれないさ」

ショーン「（決意の顔で）——AGメーザー、絶対に完成させるよ」

カイト「（頷く）——」

ミズキ「……」

○前線基地テント前

カイト、戻ってくる。と、テント脇にミズキが背を向けて立っているのに気づく。

カイト「ミズキ？」

ミズキ「(オフ)カイト、御免ね」

カイト「え……?」

ミズキ「——(横顔)あたし、カイトが何であんなに無茶な事してたのか、全然判ってなかった」

カイト「——(苦笑)聞いてたんだ……」

ミズキ「——でも、ちゃんと教えて欲しかったな、あたしにも」
ミズキ、そのまま向こうへ去っていく。

カイト「……」

○龍巖岳／翌朝

夜が明けた——。

と！ 激しく地が揺れ、地割れと共に出現するラゴラス・エヴォ。

○前線基地

隊長の前に並ぶ隊員。

ヒジカタ「怪獣は都市部に向かって侵攻を始めた。絶対に都市部へ入れるな！」

隊員「はい！」

コバ「(トレイラーに振り向き)ショーンの奴、未だ出来ないのかよ！」

ミズキ「——」

カイト「ションは今も必死に方法を考えていて、絶対にAGメーザーを作り上げます。それまでは自分達で——」

ヒジカタ「(頷き)ミサイルは使えない。恐らくプラズマショット

トにも耐性がついているだろう。口の中をブレイクショットで狙うしかない。だが、奴は超温差光線を吐いてくる――。覚悟しろ。DASH、出動！」

隊員「了解！」

上昇するDASHバード1、2、マザー。

カイトは再びDASHアルファに乗車。

○トレイラー内

必死にモニタの数値を見ながら調整しているション。髪を掻きむしり、必死に思考。

ション「(mutter) Come on, come on, come on...」

○龍巖岳

ラゴラス・エヴォが向かう方――、谷間の向こうには街が広がっている。

ラゴラス・エヴォを阻止すべく、バード1、2が時間差でビームを放つ。

グオオオオッ！ 超温差光線が二機を襲う。

○各機コクピット

コバ「直撃どころか、10m近づいただけでも蒸発させられるぜ！」

ミスキ「吐き終わった時に狙うわ！」

コバ「了解だああっ！」

○龍巖岳

光線を吐き終えたラゴラス・エヴォの口内目掛け、

二機がビームを撃つ二

しかし！ 即座に再び光線を吐かれてしまう。

バード1号、姿勢を崩し、降下していく。

○DASHアルファ車内

カイト「ミズキ！」

即座にギアを入れ、アクセルを踏み込むカイト。

○岩地

降下してくるバード1。

近くまで走り込んできたアルファ——。

カイト、マックス・スパークを手に飛び出していく。
不自然な態勢で落下していくバード1。

カイト「ミズキイイツッ！」

走っていくカイト——スローモーションに——

カイト「(モノ) これは、あの時と同じだ……」

○一話リプライズ

不時着したバード1に走っていく、私服のカイト。

カイトが操縦するバードの後方から迫る、赤い光球。

○岩地

走るカイト——。

カイト「(モノ) マックス——、教えてくれ——」

走りながら、マックスパークを腕につけるカイト。
光に包まれる——。

○赤い光球の中

そこは、一話でカイトとマックスが出会ったところ。
眩しげに見上げるカイト——。

カイト「君と出会わなかったら、僕は死んでいたかもしれない。

マックス、どうして僕を選んだんだ——」

前に立っている、ウルトラマンマックス。

カイト「マックス——。君はM78星雲から、どうしてこの地球に來たんだ？」

マックス「我々は、文明が進んだ惑星が、宇宙と調和出来るかどうかを観察している。本来、我々は直接その惑星には干渉しない」

カイト「だけど——、今俺たちには、マックスの力が必要だ——」

マックス「私はいつまでもこの地球に留まれない。宇宙と調和していくのは、人間のすべき事だ」

カイト「——」

マックス「しかしカイト——、君の、みんなを守りたいという気持ち私が動かしたのだ。私は、君に今託している。自分の判断を信じたまえ、カイト」

カイト「——ありがとう、マックス」

○変身シーケンス

カイト、ウルトラマンマックスへ。

○龍巖岳

マックス、バードーを手で支える。

○バードーコクピット

ミズキ「（微笑）ありがとうマックス。もう平気」

○龍巖岳

マックスの手から飛び立つバードー。
マックスの出現に気づいたラゴラス・エヴォ、咆哮を上げ、マックスに迫っていく。

身構えるマックス。

○マザー／コクピット

ヒジカタ「マックス——。気をつけてくれ——。こいつは——」

○龍巖岳

マックス対ラゴラス・エヴォ。

狡猾なる怪獣は、マックスの攻撃を巧みにかわす。

マクシウム・カノン発射！

しかし、ラゴラス・エヴォはそれを吸収してしまう。

マックス・ギャラクシー召喚。

ラゴラス・エヴォ目掛け、突き進むマックス。

が！ 超温差光線はギャラクシーすら寄せつけない。

押し倒されるマックス。

ラゴラス・エヴォの口蓋が、マックスの肩に噛みつ

き離さない。

○バート2コクピット

コバ「マックスまでもが喰われちゃう—— ショーン——未だか——」

○トレイラー内

ショーン「Yes!!! 出来た—— AGメーザー発射アプリケーション

ンが完成した—— エリー！」

モニタに浮かぶエリー。

ショーン「これから送る二つのデータをバード1、バード2にそ

れぞれ転送してくれ」

モニタ内エリー「はい。転送します」

○バード1／2コクピット

モニタに浮かぶショーン。

ショーン「お待たせしました。AGメーザー発射アプリケーションをバード1、バード2に転送した。違う周波数の二つの光線を同時に発射し、怪獣のマグマ・コアの直前で合点するんだ。これなら自分が爆発する事がない」

ミズキ「(笑み)やったわね、ショーン！」

コバ「おっしやあああ！ ミズキ！ タイミング外すんじゃないぞ！」

ミズキ「(不敵)そっちこそね」

○龍巖岳

必死に立ち上がるマックスだが、背後からがっちりトラゴラス・エヴォに抑えられている。

マックスのカラータイマーが赤く明滅し始めた。

と！ 飛来してくるバード1、2。

それぞれのビーム発射管が赤と青の光に輝く。

マックス、バードの接近に気づき――

○バード1コクピット

ミズキ「――(そうよ！マックス！)」

○龍巖岳

マックス――、アイコンタクトしたかのように――
サツと体を反転させ、ラゴラス・エヴォの背部へ飛び込み――、怪獣を逆に後ろから抑える。

○同/地上

トレイラーから走り出たショーン――

ショーン「今だにAGメーザー、発射に」

○龍巖岳

バード1、2、赤と青の光線を同時に放つ。
二つの光線はマグマ・コアの直前で合成され——、
とてつもない輝きになり——
ドオオオオオオオオンンンンニニニニ
マグマ・コアが微塵に破碎。
ラゴラス・エヴォの体、塵となって消失していく。

○地上

ショーン「Alright!」

○各機コクピット

ヒジカタ「——よし……」
ミズキ「やったああ！」
コバ「(ニヤリとサムアップ)」

○龍巖岳

マックス、二機のバードにサムアップし——、
飛翔。

○前線基地

笑顔で集まりショーンの頭をぐしゃぐしゃにしている
隊員達。

ヒジカタ「ショーン、よくやった」
ショーン「ま、天才の閃きって奴ですよ」
コバ「今度から、もちっと早めに閃いてくれよな」
一同、笑うそこへ、遅れて走ってくるカイト。
ミズキ、満面の笑みで手を振る。
カイト「(モノ)マックス——。今は君の力が必要だ。俺は、君

の期待に、精一杯応えていく——。そして、いつか遠い未来——、俺たち地球人も、君たちの様に宇宙に飛び立つだろう——」

以下次回